

つどい

634号

2019年8月31日

清瀬市松山一―二―一―二
カトリック清瀬教会
Tel. 〇四二(四九一)〇一〇四

先週のカトリック新聞(四九四号)の二面に載った教会の統計を見て、背筋が冷たくなる思いがしました。

前年(二〇一八年)の全信者と比べて、わずか六一名増えただけだと報告されています。信者数は四四万八九三名です。一月末に各教会(小教区)が出す教勢調査の統計報告が司教団の事務局である中央協議会で集計され今回の報告となつていきます。ですからこの数字は、日本の教会のかなり正確な実態を表しています。

四四万八九三名の信者は、教会に籍を置いている方々のことであり、ミサに来ていない方、維持費を収めていない方々も入っています。言いにくいことですが、教勢調査で

報告されていても、実際、名前だけの方々がかなり入っているの、実際には、相当、削ってみなければなりません。四四万の信者で計算しても、

絶望を希望に変えてくださる神

西川 哲彌 神父

日本の人口からすると、千人に二人しかいないことになりつます。つまり、本当に針で突いたくらい弱小団体なのです。「地の果てまで行って、宣べ伝えなさい」とおっしゃったイエスの言葉に応えて、宣教に励んできました。しかし、現実には、横ばいどころか、減る一方です。背筋が寒くなると言ったのは、限りなく〇・

一パーセントに近づく恐れを感じることです。少子高齢化現象をまともに受けて、現状維持が困難になり、現在日本に存在する八〇〇近くの教会(小教区)を、減らして行かなければならなくなる日が、すぐそばに來ていると思われつます。今まで、ばくぜんと持

つていた、なんとかなるといふ希望が崩れ、暫時、消滅の方向に向かっているとつても言い過ぎではありません。面白いことには、人口が増えている大都市では、むしろ、信者は増えています。しかし、それは大都市現象だけであること認識しておかなければなりません。今回の、教勢調査の数字からみると悲觀的に

ならざるをえないのが現実です。このことは片時も忘れてならないことを申し上げておきたいと思つます。

さて、遅々として宣教が実を結ばない中で、教会は、いつも喜びがあり、悲しい現実遭遇しても、大きい小さいを問わず、困難を乗り越えているのは、事実だし、不思議です。その原動力は、信者の信仰にあります。信者に宿つた信仰こそが宣教の種であり、日々の生活に信仰が生きつていくことを最近痛感しています。「神を父と言いなさい。父はすべて良いものを与えてくださる。望むものは何でも叶えてくださる。神をお父さんと呼んで甘えなさい。」とつて下さったイエスの言葉を、そのまま、受け取り、信じて生きていく信者の姿を見せていただいています。

統計の上で、数字だけ見ていると、教会は絶滅危惧種に

属していると言っても過言ではありません。千人に一人か二人しかいない団体で、後を継ぐ者がいないとなると、存続の希望すら持てないのが現実です。しかし、その現実を見つめながらも、希望が湧いてくる不思議さが教会にある。信者は、単純に信仰に生かされ信仰を持って生きています。信者の生き方、素朴な信仰が宣教の最大の原動力でしょう。

【清瀬教会日々の出来事】

教会学校キャンプ

八月二日（金）から四日（日）まで教会学校キャンプが行われました。



シスター石川送別会

八月十一日（日）十時のミサの中で、シスター石川（ベリス・メルセス宣教修道女会）の送別会が行われました。



聖母被昇天ミサ&パーティー
八月十五日（木）午後六時より聖母被昇天ミサが行われました。その後信徒会館にてパーティーが行われました。



【信徒動向】

〈受洗〉

アルベルト

太田久さん

(同日堅信)

フランシスコ ザビエル

長谷川孝一さん

カタリナ 竹内紗菜さん

〈帰天〉

マリア・アガタ

加藤シゲ子さん

(八十四歳)

マリア 阿曾静さん

(九十八歳)

マリア・アグネス

井上喜美枝さん

ペトロ ヨハネ

山口達夫さん

(八十三歳)

ベロニカ 吉野路子さん

(四十六歳)

〈転出〉

マキシミアノ・コルベ

橋本瑞旭さん

クララ 橋本朋子さん

ルチア 橋本春菜さん

(東京教区習志野教会へ)

〈結婚〉

アシジの聖フランシスコ

東海林健一さん

(神ともえさんと)

セシリア 高橋日向子さん

(平野真也さんと)